

放射線診断科

■対象者

- 初期臨床研修:1年次
現在原則として受け入れていない。
今後、二か月以上の研修がシステム上可能であれば2年次と同様に受け入れる。
- 初期臨床研修:2年次
二か月を標準コースとする。
当科入局希望者もしくは入局検討中など、それに準ずる場合、3か月以上を可とする。
研修担当者(子安:PHS 5243)まで事前に相談のこと。

■標準コースの内容

- ・「CT」、「MRI」、「核医学検査」を日～週単位でローテーションし、画像診断に必要な行程(撮像プロトコルの指示、薬剤投与、撮像した画像の評価、読影、レポート作成)の経験を通じて、画像診断学を学ぶ。
- ・研修医とスタッフともに人員に余裕があり、かつ上述の内容について十分研修ができていと判断した場合は、特定の領域・検査種に特化した研修も可能とすることがある。積極的に研修担当者に相談のこと。
- 研修目標
 - ・検査の適応、造影剤と核医学検査用薬剤の使用法や医療被曝について学ぶ。
 - ・画像の評価方法、正常解剖と正常所見、病的意義の少ない所見などについて習熟し、齟齬の生じにくいレポートの記載法、逆に適切な依頼内容の記載法など、実践的な知識と技能を習得する。
 - ・頻度の高い異常所見や救急疾患については鑑別診断についても学ぶ。

■三か月以上の場合

- ・放射線診断専門医になることを見据え、上述の標準コースに加え、血管造影(IVR)、超音波検査、消化管透視についても研修の対象とする。希望する場合は、夜間、休日の緊急IVRについても参加可能である。
- ・さらに時間と余裕がある場合は、特定領域に重点を置いた研修も可能とする。
- ・また国内学会での発表を経験してもらい、国際学会での発表も支援する。

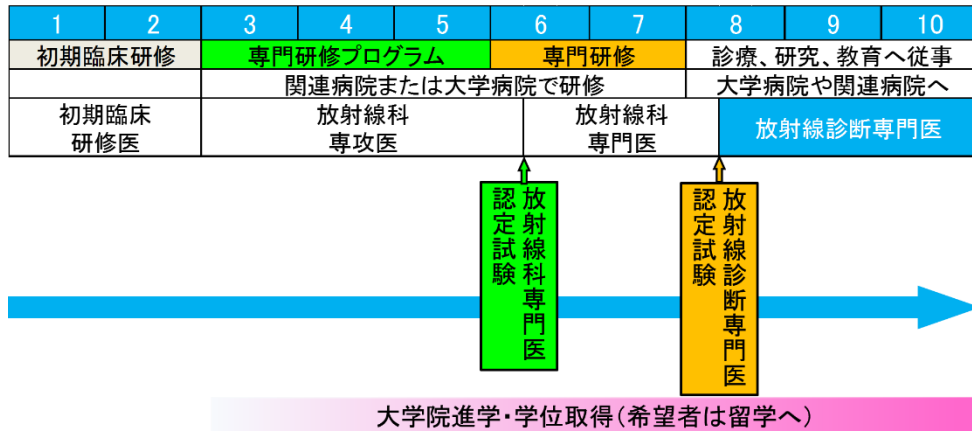
■ローテーションを推奨する診療科

- ・当科を専攻するにあたり、あらゆる科の経験が何一つ余すところなく必ず将来役に立つ。したがってすべての科のローテーションを全力で行うことを推奨する。その中でも、とりわけ病理診断科は今後の放射線診断科診療にあたり得難い経験ができるため、先方の受け入れが可能であれば研修を推奨する。

■入局後のキャリアプラン、専門医取得の要件など

図を参照のこと。質問などは担当者(大野豪: goohno@kuhp.kyoto-u.ac.jp)まで。

放射線診断専門医を取得するまでの流れ



経験すべき検査・読影・治療法

	放射線科専門医	放射線診断専門医
X線単純撮影	400例	600例
消化管X線検査	60例	200例
超音波検査	120例	400例
CT	600例	2000例
MRI	300例	1000例
核医学検査	50例	100例
IVR	30例	100例
	血管系 10例以上	
	非血管系 5例以上	
放射線治療	30例	-
	脳・頭頸部 4例以上	
	胸部・乳腺 4例以上	
	腹部・骨盤 4例以上	
	骨軟部 4例以上	
備考	3年のうちに2施設以上で研修。 1年以上は総合修練施設で研修。	

■当科の概要とスタッフの声については下記のサムネイル(動画)をクリックしてください。



放射線診断科紹介動画
<https://youtu.be/LPxJrFXrqwQ>



スタッフインタビュー動画
<https://youtu.be/9pOoidrGNQM>